

広がる風景

対話とは何か (1) 〈全三回〉ほそかわひでお
細川英雄講師
井上志音

学習のポイント

- ① 生活のなかでの対話
- ② 対話と自己
- ③ モノローグとしてのおしゃべりとは

今回から細川英雄『対話とは何か』を読んでいます。私たちは日常的に他者と言葉を通じてコミュニケーションをとっていますが、「向かい合って互いに話をする」という意味を表す「対話」もその中の一つと言えます。筆者の考える「対話」とはどのようなもので、それは「おしゃべり」とどのように異なるのでしょうか。これまでに学習した四つの「論理の力」のうち、「つなげる力」を念頭に置きながら、内容をつかんでいきます。

「つなげる力」——その前に

これまで「つなげる力」「論証する力」「要約する力」「質問する力」という四つの「論理の力」を学んできましたが、ここで一つ補足があります。それは、これら四つの順番には意味があるということです。

認知科学の世界では、人間の思考力つまり「考える力」には低次のものから高次のものまで広がりがあると考えられています。実は、つなげる力↓論証する力↓要約する力↓質問する力の順に高度になっていくということです。

まず文と文のつながりから内容を「理解」するのが第一の「つなげる力」です。次に、事実を見分けて筆者の主張がどこまで妥当なのかを「分析」するのが第二の「論証する力」。さらに「理解」したことと「分析」したことを「統合」して文章にまとめるのが第三の「要約する力」になります。

第四の「質問する力」は、質問の質によってレベルが異なります。単に「この単語の意味はなに？」といった情報の問いなら簡単ですが、たとえば今回の題名のように、「対話とは何か」といった根源的なものになると、ある別の主張を理解・分析・要約したうえで、さらにそれに対して「評価」までしないと質問できません。だれかの主張を一步離れたところから評価し、そこから質問していくことは高度なことなのです。

今回は初めての文章を使った回ですので、まずは「つなげる力」を使いながら「対話とは何か」の内容を読み解いていきます。

生活のなかでの対話／文章のなかでの対話

説明的文章を読み解く際、とりわけ題名が問いの形式になっているものについては、読む前にまずテーマの確認や概念の理解に努めて、筆者が何を論点に主張しようとしているのかをある程度想定することが大切です。

言葉を用いたコミュニケーションには、「おしゃべり」「対話」「会話」「議論」などがありますが、

- 相手はだれか
- 人数はどれくらいか
- 話し合う内容はどのようなものか
- 話し合う場面はどのようなものか
- 話し合いの目的は何か

といった観点で考えると、それぞれの共通点や相違点が見えてきます。

この文章で筆者が「対話」をどのような切り口で論じようとしているかを探りながら読むようにしましょう。

対話と自己／他者

まずは「つなげる力」で学んだ「逆接」「例示」「根拠」、そして「詳述換言（詳しく述べたり、言い換えたりすること）」の接続表現に着目しながら、対話と自己の関係性をつかんでいきます。接続表現をもとに内容を読解していく際に重要なことは、常に「接続表現の前後のどちらに筆者の主張がくるか」という視点を持つことです。

- 逆接……………筆者の主張（しかし）別の主張／別の主張（しかし）筆者の主張

※特に「確かに／しかし／が」の表現を「譲歩」という。

- 例示……………主張（たとえば）具体例／（たとえば）具体例 ↓ 主張

※例示の表現は省略されることがある。「～ような／み

たい」等の表現にも注意する。

- 根拠……………主張（ならば）根拠／根拠（だからこそ）主張

- 詳述換言……………（つまり／すなわち／このように）主張

文章中の接続表現を



で囲い、その前後の筆者の主張部に傍線を引くと、筆者の言いたいことがつかみやすくなるでしょう。

接続表現に着目すると、「対話と自己」／他者について、

「対話と自己」…… おしゃべりは自分の知っている情報を独りよがり
に話しているだけ（なので）思ったことを感じるま
まに話すことは注意が必要だ／自己完結的で発展性
がない。（よって、おしゃべり≠対話）

「対話と他者」…… 対話は、自分自身の個人的領域から他者という未
知の存在へ働きかける公的領域への行為（だから）、
個人が言葉を使って自由に活動できる社会の形成に
つながる。

とまとめることができます。



目的外の
使用禁止

対話とは何か

ほそかわひでお
細川英雄講師
井上志音

今、対話とは何かと考えると、どのように説明できるでしょうか。とても簡単にいえば、「相手と話すこと」ということになるでしょうか。

しかし、一方的に相手に話しかけても、その相手がこちらの言っていることに耳を傾けてくれるかどうかは、誰も保証できません。

相手の目をしっかり見て、きちんと語りかけること、ちまたの話し方講座などではこんなアドバイスがあるかもしれませんが。そのとき、しばしば出るのは、「思ったことを感じるままに話してはだめだ。」という意見ですね。思ったことを感じるままに話すと、お互いに感情的になってしまい、解決すべきことがなかなかうまく運ばない、等々。

しかし、「思ったことを感じるままに話す」ことそれ自体が悪いことだとは、私は決して思いません。むしろ「思ったことを感じるままに話すべき」であるとさえ思うほどです。

ただ一つ、思ったことを感じるままに話すと、それがおしゃべりになってしまふという大きな課題があります。

ここでいう「おしゃべり」とは、相手に話しているように見えながら、実際は、相手のことを考えない活動だからです。少し難しくいうと、他者不在の言語活動なのです。

でも、相手があつて話をしているのだから、他者不在とはいえないのではないかとこの質問も出そうですね。

確かに、おしゃべりをしているときは、相手に向かって話しかけてはいますが、ほとんどの場合、何らかの答えや返事を求めて話しているのではなく、ただ自分の知っている情報を独りよがり話しているだけではないでしょうか。そこでは、他者としての相手の存在をほぼ無視してしゃべっているわけです。だからこそ、思ったことを感じるままに話すことには注意が必要なのです。

「あのことが、うれしい、悲しい、好きだ、嫌いだ。」というように、自分の感覚や感情をそのまま言葉にして話していても、相手は、「へえー、そうですか。」と相づちを打つだけ。今度は相手も自分の思いを語り始め、それぞれに感じてい

目的外の使用禁止

ることや思っていることを吐き出すと、お互い何だかすっきりして、何となく満足する。こういうストレス発散の点では、おしゃべりもそれなりの効果を持っています。その次の段階にはなかなか進めません。

このように、いわゆるおしゃべりの多くは、かなり自己完結的な世界の話ですから、そのままでは、それ以上の発展性がないのです。その意味では、おしゃべりは、相手に向かって話しているように見えても、実際は、モノログ（独り言）に近いわけでしょう。表面的には、ある程度、やりとりは進むように見えますが、それは、対話として成立しません。ここにモノログであるおしゃべりとダイアログとしての対話の大きな違いがあります。

ちょっと余談になりますが、カルチャーセンターの講演会や大学の講義などでも、こうしたモノログはよく見られます。本来、聴衆や学生に語りかけているはずのだけれど、実際は、自分の関心事だけを自己満足的にととうとと話している、これはまさにモノログの世界ですね。

これに対して、ダイアログとしての対話は、常に他者としての相手を想定したものです。自分の言っていることが相手に伝わるか、伝わらないか、どうすれば伝わるか、なぜ伝わらないのか、そうしたことを常に考え続け、相手に伝えるための最大限の努力をする、その手続きのプロセスが対話にはあります。

対話成立のポイントはむしろ、話題に関する他者の存在の有無なのではないかと私は考えます。実際のやりとりには他者がいるかどうかだけではなく、話題そのものについても「他者がいる話題」と「いない話題」があるということなのです。つまり、その話題は、他者にとってどのような意味を持つかということが対話の進展には重要だということです。

したがって、ダイアログとしての対話行為は、モノログのおしゃべりを超えて、他者存在としての相手の領域に大きく踏み込む行為なのです。

言い換えれば、一つの話題を巡って異なる立場の他者に納得してもらうために語るという行為だともいえますし、言葉によって他者を促し交渉を重ねながら少しずつ前に進むという行為、すなわち、人間なら誰にでも日常の生活や仕事で必要な相互関係構築のための言葉の活動だといえるでしょう。

では、このようなダイアログとしての対話によって人は何を得ることができのでしょうか。あるいは、今、対話について考えることは、私たちにとってどのような意味を持つのでしょうか。

まずあなたは対話という言葉の活動によって相手との人間関係を作っています。

目的外の
商用禁止

その人間関係は、あなたと相手の二人だけの関係ではなく、それぞれの背負っている背景とつながっています。

その背景は、それぞれが関わっているコミュニティと深い関係があります。相手との対話は、他者としての異なる価値観を受け止めることと同時に、コミュニティとしての社会の複数性、複雑さをもとに引き受けることにつながります。

だからこそ、このような対話の活動によって、人は社会の中で、他者とともに生きることを学ぶのです。

このように、対話は、個人と個人が何かの話題について話し合うことだけではなく、それぞれの個人が言葉を使って自由に活動できる社会の形成へという可能性にもつながっていきます。なぜなら、言葉を使って自分の考えていることを他者に伝えるという行為は、自分自身の個人的な私的領域から他者という未知の存在へ働きかける公的領域への行為だからです。

あなたにとっての対話という活動は、あなた自身が言葉を使って自由に活動できる社会の形成のための重要な鍵になるといえるでしょう。



目的外的
使用禁止